

### 理事長就任にあたって

有 賀 貞（一橋大学）

昨年10月29日の理事会におきまして、今期理事長に選ばれましたことは、まことに光栄に存じておりますが、今日に至る学会の発展に貢献された歴代理事長に比べ甚だ非才非力、理事長として学会の威信を保ち得るや否や今なお身も縮む思いであります。当日の理事会の席で申し上げましたように、強力な野球チームも連戦となれば時には二線級の投手を出さなければならないことに似た状況と思い、強力な打線の援護を頼みとして、あえてお引き受けした次第であります。今期2年の間、学会運営に微力を尽くしてまいりたいと存じます。会員各位のご協力を心からお願い申し上げます。

本学会の特色の一つは、研究大会のプログラムが豊富なことであります。研究大会を春秋それぞれ2日間開催し、毎回、共通論題シンポジウムといくつもの部会をプログラムに組んできました。分科会の会合も盛んに行われており、2年に1回程度は分科会の会合を大会の正規のプログラムの時間に組み入れています。このようなプログラムによって、研究関心の共通性と多様性ととの均衡が維持されるとともに、比較的多くの会員に研究発表の機会が提供されて来たと思えます。運営委員会は、アンケートへの回答など会員の方々からの提案、意見、要望をとりいれて、共通論題・各部会のテーマおよび報告者を決めております。今後さらに工夫を加えつつ、このような方式を継承して参りたいと存じます。

年3冊刊行の機関誌『国際政治』は創刊以来、特集形式をとっておりますが、これは重要テーマについての研究を刺激するために、また会員の研究が多くの関心ある人々によって読まれるために、きわめて適切な方式であります。特集テーマについても幾つかの公募論文を掲載しており、そのほか特集とは関係無いテーマの投稿論文もレフェリー制による審査を経て掲載していますので、機関誌もまた十分に開放的であると存じます。

本学会はこれまで海外の学会との協力や交流に力を入れてきました。ISA、BISAとの従来の協力関係を維持するほか、海外諸地域の諸学会との交流を盛んにし

ていくことにより、国際関係研究の国際的ネットワークの形成に貢献する方針であります。海外では、本学会の国際的役割への期待が大きく、いずれは、かなりの規模の国際的研究集会を日本で開催することを考慮すべきときが来ると思います。

このような海外における期待は本学会の国際的評価が高いことを意味しておりますが、会員の方々の研究成果がそれほど広く海外に知られている訳ではありません。その点で、学会内に国際学術交流基金が設けられ海外の学会で研究発表をされる会員に対して若干の助成が可能になりましたことはきわめて有意義なことでもあります。

また『国際政治』20周年記念号を基礎にして編集された2冊の英文出版は、日本における研究の紹介に役立つもので、両書の刊行の実現はまことに慶賀すべきことであります。しかし現在の研究上の圧倒的な輸入超過を改めていくためには、水準の高い英文の専門誌を刊行することが必要でありましょう。学会では昨年海外向けに年1回国際ニューズレターを発行しておりますが、そのような英文誌の刊行が可能かどうかについても検討してみたいと思っております。

本学会の多くの会員の方々がさまざまなメディアを通して日本の対外政策の問題や国際問題について発言し、世論の形成に貢献してきましたが、国際関係が変動期を迎えている現在、そのような貢献はますます重要になっております。国際的相互依存関係が強まっている反面、いくつかの西側先進国では感情的なナショナリズムが出て来ております。日本においても、その傾向がみられ、それは現在の対外問題に関してだけでなく、歴史の理解にもかかわっています。感情的なナショナリズムは若い世代にも見られます。このような状況を考えますと、歴史を含めて国際関係に関する研究と教育に携わる者の責任はまことに大きいと思えます。

学会の会員各位のますますのご活躍を祈り、それとともに、学会の運営についてのご意見をお寄せ下さることを重ねてお願いする次第であります。

## 春季研究大会共通論題

—国際政治の構造変動と地域の新展開—

国際政治は、なぜ、今、画期的な構造変動を遂げているのだろうか。今日ほど国際政治が深い現実の変化を体験している時代は、第二次大戦後の歴史の中でもめずらしい。国際政治は、現在、力の相互作用とルール・オブ・ゲームズの両面において、地殻変化ともいべき大きな構造変動を遂げつつあると思われる。とくに1980年代の中頃以降、米ソの国際関係が指導者レベルの意思疎通の改善を図りつつ、軍備管理と軍縮の面での対話と交渉を定着させようとしており、これによって国際政治の大きな枠組は、緊張緩和（デタント）の潮流を活性化させる方向で変化をみせている。そのような大状況の変化が国際政治の地域、サブシステム、そしてダイナミックスのあり方に重要な影響をあたえていくと考えられる。事実、国際政治は、アフガニスタンからのソ連軍の撤退、イラン・イラク戦争の停止、中ソ関係の着実な改善、カンボジア問題の解決の模索と次々と変化をみせてきている。

国際政治は、同時にまた、ヨーロッパにおける国際安全保障の再編化や1992年末までのECの域内市場統合完成化、そして各地域での保護主義的経済ブロック化、さらに中南米地域を中心とする累積債務問題の深刻化といった重要な変化をみせてきている。国際政治の構造変動は、果して、長期的には、東西国際関係における従来の「冷戦の構造」を変容させるばかりでなく、ネーション・ステート同士の相互作用のあり方までも変質させていくとするのだろうか。

春季国際政治学会の共通論題として、「国際政治の構造変動と地域の新展開」というテーマを掲げるのは、国際政治の大枠の構造変動の重要性を認識しつつ、そのような現実の性格の変化がどのように具体的に地域的国際関係の変容をひき出しつつあるのか、両者の連関の実際とその意義とを深く検討することが今必要な課題だと思われるからである。さらに地域の新展開には、米ソの中心に対して、従来のように中立主義や非同盟の流れを単に形成するのではなく、積極的に対外政策の行動の自由を旨とし多重の相互依存構造を深めようとする中小国や途上諸国の動きもあろう。なぜ、国際政治は量的質的变化を強めようとしているのか。春季大会の共通論題の目的とするところは、国際政治の構造的変動の長期的視野に立った特色と、それに伴う地域国際関係におけるダイナミズムの新たな展開を明らかにする試みである。ネーション・ステート・システムにおける国々や人々の安全保障認識の変容や、EC、ASEAN、NIESといった地域国際関係の特質に関する分析が深められることを期待したい。

(運営委員会)

## 研究分科会の近況

安全保障分科会：伊豆見 元（静岡県立大学）

88年度秋季研究大会では、ご報告を二つお願いしました。武田康裕会員（東京大学大学院）からは「トルーマン政権のベトナム援助政策」、朱建栄会員（横浜市立大学客員研究員）からは「中国国防戦略の転換について」と題した報告を頂き、それぞれ武田報告にたいしては木村卓司会員（防衛研究所教官）、朱報告にたいしては、川島弘三会員（防衛大学校教授）によるコメントののち、参加者とのあいだで活発な議論をおこないました。

(司会・山本武彦)

分科会の責任者が、山本から伊豆見に交替いたしました。春季大会までに1～2度研究会をもちたいと考えております。ご報告ご希望の会員は下記までご連絡ください。

国際統合分科会：杉山 恭（青山学院大学）

当分科会の前回報告以降の活動状況は次の通りです。

第45回研究会 4月23日（土）

杉山 恭（青山学院大学）

「米国国際学会（ISA）・教育・文化・科学交流国際学会（ISECSI）1988年度研究大会に見られるアメリカの国際学の現状」

第46回研究会 5月28日（土）

越智 尚（上智大学）

「西ドイツの対外文化政策—ボン・ワルシャワ学術交流の事例研究」

第47回研究会 6月25日（土）

平野健一郎（東京大学）

「国際社会におけるヒトの移動について」

第48回研究会 7月16日（土）

山影 進（東京大学）

「相互依存時代の国際摩擦」

当分科会研究会における報告または参加ご希望の方は、下記にご連絡下さい。

日本国際政治学会国際交流分科会事務局

青山学院大学国際政治経済学部 417号室

〒150 東京都渋谷区渋谷4-4-25

TEL. 03 (409) 8111 (内線2417)

## 東京地区院生研究会：角南 治彦

(早稲田大学大学院博士課程)

本会のこれまでの活動は次の通りです。

1988年11月18日

報告者 石川 照子 (日本学術振興会特別研究員)  
テーマ 『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』の紹介と書評。

1988年12月14日

報告者 賀川 真理 (慶應義塾大学大学院)  
テーマ 『サンフランシスコにおける学童隔離問題—1906年の隔離案と日米の対応を中心として』

コメンテーター 原口 邦紘 (外務省外交史料館)

なお、書評・研究報告を御希望の方は、下記に御連絡下さい。

角南治彦  
河原匡見

## 関西地域研究会：豊下 梢彦 (京都大学)

本年 (1988年) 度、関西例会は、以下のように研究会を催しました。

日時 4月9日

報告者 渡辺 正志 (神戸大学)  
テーマ 「帝国支配と従属地域の対応—イギリスによるイラクの委任統治」

日時 7月9日

報告者 高屋 定国 (仏教大学)  
テーマ 「北朝鮮の国家体制と対外政策」

日時 9月10日

報告者 伊藤 由子 (甲子園大学)  
テーマ 「オリエンタリズムと近代ヨーロッパの形成」

日時 11月19日

報告者 平井 友義 (大阪市立大学)  
テーマ 「ペレストロイカの現状—モスクワでの討議を踏まえて」

## 東アジア国際政治史分科会：藤井 昇三

(電気通信大学)

当分科会の最近の活動状況は次の通りである。

① 1986年3月12日 姫田光義 (中央大学) 「抗日戦争前、南京国民政府の軍事政策—蔣介石を中心として」 (学会館)

② 1987年3月25日 栃木利夫 (法政大学)・坂野良吉 (埼玉大学) 「劉継増等『武漢国民政府史』について」 (学会館)

③ 1987年5月21日 森山昭郎 (東京女子大学) 「中国の体制改革の二、三の問題」 (明治学院大学)

④ 1987年5月25日 高橋久志 (防衛庁防衛研究所)・川井伸一 (中央大学、現在は日本国際問題研究所) 「中国現代史研究会編『中国国民政府史の研究』について」 (YMCA会館)

⑤ 1987年6月20日 日本外交史分科会と共催、L.H.D.ゴードン (パーデュー大学)・S.H.チャン (カリフォルニア州立大学) 「孫文研究の現段階」 (成蹊大学)

⑥ 1987年7月25日 民国史研究会・中央大学人文科学研究所共催「五四運動研究 シンポジウム」 (中央大学)

⑦ 1988年3月11日 牛大勇 (北京大学) 「1927年武漢政府外交政策」 (慶応大学地域研究センターと共催) (慶応大学)

⑧ 1988年11月16日 段雲章 (中山大学) 「孫文と陳炯明の関係について」 (辛亥革命研究会と共催) (日本女子大学)

以上の中で、⑥については、最近日本で五四運動をめぐって活発な論争が展開されているので、国内の東西中国近代史研究者に呼びかけて (発起人の中心は横山宏章会員) 約百名の研究者が一堂に会して一日、五名の報告とそれに続いて白熱した討論を行った。

なお、③と⑤を除く6回の研究会は、当分科会所属の部会である民国史研究会が開催したものである。

当分科会への入会および報告をご希望の方は下記へご連絡頂きたい。

## ラテン・アメリカ分科会：松下 洋

(南山大学)

この3年間には、以下の報告が行なわれた。

1986年5月18日 (春季大会)

松下 洋 「ラテン・アメリカの従属論とウォーラースティンの世界システム論との異同をめぐって」

1987年5月24日 (春季大会)

浅香幸枝 「ラテン・アメリカの日系移民に関する最近の

研究をめぐって」

1988年5月21日（春季大会）

田中 高「中米和平合意とニカラグア内戦」

1988年10月29日（秋季大会）

大串和雄「ラテンアメリカの政治と軍部」

この内、田中高会員の報告とそれをめぐる議論については、すでに『ニューズレター』第44号で紹介済みである。参加者は毎回10名程度で小規模だが度々“白熱の議論”が展開されており、今後は年二回の開催を目標に、分科会としての発展を図ってゆきたいと思っている。

#### 国際統合分科会：中原喜一郎（東海大学）

1988年度は春季研究大会（帝塚山大学）のさいにヨーロッパ国際政治史分科会と合同分科会をひらき、慶応義塾大学大学院の吉武信彦会員の「グリーンランドとEC脱退問題 1970-85年」について報告をきき、活発な質疑応答がなされました。秋季研究大会においては国際統合分科会はひらきませんでした。本分科会は、研究大会のさいに会合する慣例ですが、本学会会員の地域統合や世界統合に関する御研究の発表を期待します。他の分科会との合同会合も積極的に進めたく存じます。御連絡は下記におねがいします。

#### 平和研究分科会：岡本 三夫（四国学院大学）

平和研究分科会では、ここ数年間、大学における平和研究の制度化の諸問題をフォローしてきた。その結果判明したことの一つは、すでに28国公立大学35講座、36私立大学53講座、さらに22短大26講座の合わせて86大学・短大114講座において、平和研究と密接に関係した授業が行われているということである。

また、米国においても、平和研究関係カリキュラムは169大学235講座において存在することが確認されている。

1989年度は、3月から4月にかけてロンドンで開催されるISAの平和研究部会や、同じくロンドンで開催されるIPRA（国際平和研究学会）関係のミーティングに平和研究分科会のメンバーが出席を予定しているので、国際的な動向や、これらの集まりでの成果を踏まえて、平和研究分科会としての新しい方針を打ち出し、創造的な課題に挑戦したいと考えている。

### 国際学術交流基金の1989年度第1回申請 受付けについて（国際学術交流基金委員会）

以下の要領にて、国際学術交流基金の1989年度第1回申請を受付けたいと存じますので、ご活用下さい。

記

1. 該 当 者 国際学術交流基金管理運用規定第4条(1)に定められた3項目の活動のいずれかを、1989年8月初めから1990年1月末までの間に行うことを予定している会員。
2. 受付け方法 以下についての書類の郵送または提出。（書式は自由）
  - (1) 国際会議出席の場合：
    - (イ) その国際会議の開催期日、場所、規模および性格など。
    - (ロ) 出席の方法。（報告する場合は、そのテーマの内容）
  - (2) 外国人招待の場合：  
その外国人についての紹介、招待による活動の目的、方法および期間。
  - (3) 所要経費の概算見積り。
3. 受付け期日 1989年5月20日～21日（春季大会第2日目）午前11時。
4. 受付け場所 学会事務局または秋季大会中は会場受付け。
5. 結 果 規定第4条(2)により、申請者宛に連絡。
6. 問い合わせ先 学会事務局  
(TEL. 0425-72-1101 内線 467)

### 第14回特別委員会の活動開始 —— 日本学術会議 ——

(1) 第14期の特別委員会

1988年10月の第106回総会で決定された、日本学術会議の第14期活動計画では、重点目標として、①人類の福祉・平和及び自然との係わりを重視する学術の振興、②基礎研究の推進と諸科学の整合的発展、③国際関係の重視と国際的寄与の拡大、の3本の柱を掲げるとともに、第14期中に適切な形で報告・提言に取りまとめるべき具体的課題として15の課題を選定している。

この度設置された7つの特別委員会は、上記の具体的課題のうち、従来から常設されている6つの常置委員会（別掲参照）で取り扱うものを除き、かつ、緊急に調査審議を行う必要のある7課題に対応するものである。

◆「平和及び国際摩擦に関する特別委員会」委員長：

川田 侃（第2部会員）、（任務）国際的視野と我が国が置かれている地域的狀況や特性を踏まえて、国際摩擦（文化的・政治経済的・技術的等）の解決と平和に関する総合的な研究の推進の在り方やその体制等について検討する。

◆「医療技術と社会に関する特別委員会」委員長：水越治（第7部会員）、（任務）医療技術の急速な進展は、自然科学の分野だけでなく、人文・社会科学の領域にも種々の問題を提起している。様々な医療技術に係わる社会的側面を総合的に検討する。

◆「生命科学と生命工学特別委員会」委員長：井上英二（第7部会員）、（任務）生命科学と生命工学の推進方策を検討するとともに、これらの急速な進歩を踏まえ、それらと人間・社会及び自然との係わりについても総合的に検討する。

◆「農業・農村問題特別委員会」委員長：水間 豊（第6部会員）、（任務）農業・農村のもつ食糧生産や環境保全等の多面的機能について、近年の国際的・国内的状況を踏まえつつ、文化・経済・自然・都市との係わりで幅広く検討する。

◆「資源・エネルギー問題特別委員会」委員長：上之園親佐（第5部会員）、（任務）資源・エネルギーの開発と利用の問題を検討する。それに伴う自然及び人間社会への好ましくない影響を防止するという観点からも問題を検討する。

◆「人間活動と地球環境に関する特別委員会」委員長：吉野正敏（第4部会員）、（任務）近年、経済社会活動の拡大等を背景に、人間活動が環境に及ぼす影響が地球的規模で広がっており、深刻化する可能性を強めている。このような状況を踏まえ、人間活動と地球環境の問題点を検討する。

◆「高度技術化社会特別委員会」委員長：佐藤 豪（第5部会員）、（任務）エレクトロニクス、メカニクス等の技術の発展・普及が社会に及ぼす影響、社会の情報化・技術化と人間との調和等について検討する。また、巨大な技術システムとヒューマン・ファクターとの関連についても安全確保と人間性確保の立場から検討する。

なお、以上の7つの特別委員会のほかに、先般の総会の申合せにより、本年の4月総会において、人間の科学特別委員会（仮称）を追加設置する予定である。

## (2) 常置委員会

日本学術会議は、別掲の特別委員会のほかに、6つの常置委員会を設置している。各常置委員会の名称と任務等は、次のとおりである。

第1常置委員会（委員長：大石泰彦（副会長・第3部会員）

（任務）研究連絡委員会活動活性化の方策及び日本学術会議の組織等に関することを審議する。

第2常置委員会（委員長：星野安三郎（第2部会員）

（任務）学問・思想の自由並びに科学者の倫理と社会的責任及び地位の向上に関することを審議する。

第3常置委員会（委員長：渡邊富士夫（第7部会員）

（任務）学術の動向の現状分析及び学術の発展の長期的動向に関することを審議する。

第4常置委員会（委員長：樋口敬二（第4部会員）

（任務）創造的研究醸成のための学術体制に関すること及び学術関係諸機関との連携に関することを審議する。

第5常置委員会（委員長：市川惇信（第5部会員）

（任務）学術情報・資料に関することを審議する。

第6常置委員会（委員長：染谷恭次郎（第3部会員）

（任務）国際学術交流・協力に関することを審議する。

## (3) 1989年度共同主催国際会議

世界の代表的な科学者が一堂に会し、最新の研究情報を交換する学術関係の国際会議が、我が国でも数多く開催されている。1989年度には、次の4国際会議を開催する。

第14回高エネルギー加速器国際会議（8月21日～26日）  
学園センタービル等（つくば市）共催団体：（社）日本物理学会

第40回国際電気学会（9月17日～22日）、国立京都国際会館（京都市）、共催団体：（社）電気化学協会

第7回国際人工臓器学会世界会議（10月1日～4日）、京王プラザホテル（札幌市）、共催団体：日本人工臓器学会

第9回結晶成長国際会議（8月20日～25日）、ホテル仙台プラザ（仙台市）、共催団体：日本結晶成長学会、（社）応用物理学会

## (4) 二国間学術交流事業

日本学術会議では、二国間学術交流事業として、毎年2カ国を選んで代表団を派遣している。

この事業は、1983年度から実施されており、これまでにアメリカ、マレーシア、西ドイツ、インドネシア、スウェーデン、タイ、フランス、大韓民国、連合王国、シンガポールの10カ国に代表団を派遣してきた。

1988年度は、10月29日から11月7日まで、チェコスロバキア及びポーランドへ、会長以下6名の会員から成る代表団を、また11月27日から12月4日まで、カナダへ、会長以下5名の社員から成る代表団をそれぞれ派遣した。

チェコスロバキア及びポーランドは、本会議としては初めての社会主義国の訪問であった。

（上智大学：川田 侃）

## 《海外留学雑感》

「小国」の窓から 百瀬 宏(津田塾大学教授)

その昔ヘルシンキでアルジェリアの留学生から教わった「かくも長き不在」というシャンソンを思い出しながら、ヴェンター空港に降り立ったのは昨春のことである。20年ぶりのフィンランドは、日本の急激な変化から想像もつかないほど、なつかしい街並みや、人びとの気質を残していたが、それでも底流は次第に変わっており、都心のおびただしい建築工事現場と交通ラッシュが、近年の同国の経済的繁栄ぶりを反映していた。フィンランドをめぐる国際環境の変動もいちじるしく、EC強化問題にたいする対応やC S C Eの成功への期待が話題を賑わしていた。とりわけ昨年は、バルト海を隔てたエストニアの動向ともあいまって、対ソ関係やその歴史解釈にも興味深い進展が見られた。

しかし、何よりも有難かったのは、同国の外交史料が1944年9月以前に限り外国人研究者にも解禁となったことである。新装なった外務省の建物の一隅の史料館で、暖かい配慮を受けながら楽しく研究できた1年間は忘れがたい。それにつけても反省させられたのは、国際交流にたいする自分の日頃の無関心であった。当地でも、一

般的な日本にたいする関心を背景に、外交史の分野でも、対日関係やヨーロッパの問題の延長線上での日本の関わりに研究者の関心が向いてきていた。大学院生たちの質問攻めにあつて初めて、日頃国内消費の研究活動しかしてこなかったことを思い知らされたが(この点、学会が日本における研究状況の英文版を出されたことの意義を身にしみて感じたのである)、さらに本質的な事柄として、日本に関心をもつ研究者の卵たちを受け入れる態勢が、まだまだわが国に不足していることを痛感させられた。

日米の交流はすでにあり、アジア・太平洋諸国との交流も努力がなされ、英仏では自前の若手研究者派遣体制がととのえられてきているが、他のヨーロッパの諸国——とくに諸「小国」——の学生たちは本当に不利だ、ということが当地で訴えられた。公私の奨学金の人数枠ももっとふえてほしいし、自費でも留学しようとする学生が日本における関心テーマの研究教育状況を容易に把握できるような工夫が、必要であろう。受け入れ先の手づるがまったくない学生でも、能力さえあれば奨学金の対象として問題なく信用される状態がもっとも望ましいが、そうなるためには今度は、われわれ研究教育界の国際化が求められることになろう。

## 若手研究者の声

### 「注目するペレストロイカの行く方」

小沢 治子

私は日ソ関係、特にロシア革命後日ソ国交樹立にいたるまでの両国の交渉過程に関心を持ち、研究を進めてまいりました。現在は、この時期のソ連側の対日政策について文献、資料を集めております。2年前の本学会で拙ない報告をいたしました。多くの方から卒直なご意見、ご感想を賜りました。

さて、私のような外交史研究に携わる者にとりまして資料との出会いは、研究の命運を決するといっても過言ではありません。その意味で、政治体制の点から情報の制約の多いソ連の対外政策研究が最初から困難を伴っていることについては、すでに諸先生、先輩方が感じておられるものと存じます。私が扱っている時期のソ連の対外政策文書集は、ソ連外務

省より刊行されてはおりますが、これのみに依拠するのではやはり限界があります。そこで『日本外交文書』をはじめとする日本側の資料、またF.R.やその他欧米で刊行されているソ連外交関係の資料集とソ連刊行による文書とのつき合わせがどうしても必要となってくるのです。外務省外交史料館には、当時の日本側関係者が赴任先から本省に打電した記録が所収されていますが、この中にはソ連の対外政策決定過程の内部事情を窺わせるような資料もあり、貴重なヒントとなっています。また紋切り型の対日非難の多いソ連側刊行の文書集の中にも、ソ連外交の本音をあらわす外務人民委員部内部のやりとりも時には収められており、こうした資料に出会った時は、思わずゾ

クッとするような興奮を覚えてしまいます。

ソ連では現在歴史の見直しが進められ、昨年2月にはブハーリンが復権、最近ではトロッキーの著作を引用した論文も発表されていると聞いています。今後徐々に政治的制約が取除かれ、資料の公開も進むならば、新しい角度からのソ連の対外政策研究も可能であると思われます。その意味で、私もペレストロイカの行方を熱い想いで見守っている者の1人です。

隣接学会でありますソ連東欧学会、また日本国際問題研究所の研究会からは毎回多くの貴重な示唆を受けております。さらに本学会の分科会活動にも関心を持っています。今後ともよろしく願いたします。

(常盤学園短期大学非常勤講師)

## 古武士の風格——大平善梧先生のこと

大 畑 篤 四 郎 (早稲田大学)

大平善梧先生は本年3月10日、脳梗塞のため逝去されました。葬儀は3月12日、先生が昭和44年から45年にかけて学長を勤められた青山学院大学の礼拝堂で行なわれ、細谷千博教授が葬儀委員長の任を果された。

ポーツマス講和条約が締結されて間もない明治38年(1905年)9月19日、先生は会津若松の地で誕生された。昭和4年3月、一橋大学の前身である東京商科大学を卒業して国際法学の研究に従事し、同大学の助手、助教授をへて、昭和17年に同大学教授、26年には一橋大学法学部教授となった。44年に定年により退官、青山学院大学教授となり49年まで在職された。その間同大学学長として大学紛争の解決を果された。その後は亜細亜大学教授となり、昭和60年まで教鞭をとられた。

大学で教鞭をとられる一方で、先生は昭和14年からは東亜研究所および外務省条約局の囑託として中国にわたり、租界や揚子江の国際法上の地位等についての論文を相ついで発表され、18年には『支那の航行権問題』の著書を発表している。戦後も一貫して国際法の研究に当り、国際法外交雑誌、一橋論叢その他に精力的に論文を発表された。特に編著として『国際貿易憲章の研究』『世界貿易憲章の諸問題』『国際不正競争の研究』『軍縮問題の研究』『核時代の軍縮問題』『軍縮の総合的研究』『国際法講義』等の研究をまとめられ、終戦直後の時期に『最新国際条約集』も編集された。

しかし先生の研究関心は国際法学の枠組をこえて、国際関係論の分野にまで向けられた。昭和34年には『日本の安全保障と国際法』、翌年には『集団安全保障と日本外交』を発表している。そしてこの時期には安全保障研究会を中心として、安保条約改定推進の積極的な論陣をたった。国際情勢と外交に対する現実主義的な感覚から、直感的な言論活動をとられたのであろう。その後も『アジア外交と日韓関係』を発売している。しかしその後は幅をひろげて『現代国際関係論』『国際関係論』の編著にも当られた。

先生は日本国際政治学会の創立にも参画され、理事として学会の基礎固めにつとめられ、のちには名誉理事に推薦された。

大平先生は会津武士の流れをひいて剣道をたしなまれ、その豪放な人柄とともに古武士の風格をただよわせていたが、その反面では若い時から短歌に親しまれ、歌集や歌論を発表されている。また先生の卒業論文は「グローチウスの自然法の神学的考察」であったというが、早く

から熱心なキリスト者であられた。先生のみ霊が安らかに昇天されることを祈る。

## 江口朴郎先生をしのんで

木 畑 洋 一 (東京大学)

わが国における国際関係論、国際政治史研究の先達であり、日本国際政治学会にも創設期以来の会員として多大の貢献をされてきた江口朴郎先生は、本年3月15日、次の誕生日を目前にして、77歳の生涯を終えられました。

江口先生は、1933年に発表された「1901年の英独同盟問題」を皮切りに、数多くの著書、論文を公にされると共に、東京大学、法政大学、津田塾大学などにおいて学生の教育にあたられ、現代史、国際関係論を学ぼうとする者に、大きな影響を与えてこられました。『帝国主義と民族』(1954年)で鮮やかに示された、現代世界の動態分析の基本的視角、とりわけさまざまな不均等な状態を含みこんだ世界の重層的な構造の指摘と、その中で民族というモメントの位置づけをはじめ、江口先生が提起された問題は、後学の者にとっての貴重な道しるべとなってきています。また、平和の問題や、「第三世界」の人々との友好関係の推進など、理論的探求と現実の行動の統一という面でも、江口先生は身をもって範を示されました。

私自身は、江口先生が東京大学を定年退官される直前の時期に、学部と大学院で先生のクラスに参加させて頂いて以来、約20年間先生のお教えを受けてきました。先生の訥弁はきわめて有名ですが、とつとつと話されるその授業は、それだけに聞くものの緊張を強いるところがあり、聞いて分からなかった「江口語」の意味を確かめようと、『帝国主義と民族』や、その頃出版されたばかりであった『帝国主義の時代』のページをくり直したことを覚えています。大学院のゼミにおいては、いろいろな問題に性急に答えを出そうとする私たちに対して、江口先生は、もっと深く落ち着いて考える姿勢をとるよう、ごくさりげなく促されていたように思います。江口先生の口癖のひとつであった「よかれあしかれ」という言葉にあらわれているように、物事を一面からきめつけてしまうのではなく、複眼的に捉え、教条で切るのでなく、あくまでも現実在即してみるという態度を、先生は私たちに伝えようとされていたのでしょう。今から思えば、先生の訥弁も、そうした先生の思考の型を反映したものであったのかもしれない。

世界が動いているということが、いろいろなところで実感される今日、江口先生の見方と評価を改めてうかがいたいことが多くありますが、それも今はできなくなりました。残念でなりません。

## 隣接学会開催予定

### ◎日本政治学会

次回大会 10月7日(土), 8日(日)  
神奈川大学法学部

共通論題 (A) 再調整の政治過程  
(B) フランス革命への新しい視角

### ◎国際法学会

5月14日(日)

春季大会 明治大学(駿河台校舎)

### ◎アジア政経学会

関東部会 5月28日(日) 東京大学(駒場)

関西部会 6月10日(日) 大阪経済大学

### ◎国際経済学会

全国大会 10月中央大学(予定)

### ◎日本平和学会

春季大会 6月3日(土), 4日(日), 新潟大学  
特別シン

ポジウム「東北アジア経済圏の協力構想」

※ 今後新たに掲載希望の隣接学会名をニューズレター委員会まで御知らせ下さい。

## 事務局だより

本学会の正式な所在地は今まで通り一橋大学ですが、日常的活動を担当する事務局は昨年12月に慶應義塾大学に移りました。事務局長は松本三郎副理事長の兼任ですが、通常業務は副事務局長の国分良成が担当いたします。また業務の補佐を石井貫太郎会員(慶應義塾大学大学院生)が担当いたします。事務局は〒108 東京都港区三田2-15-45 慶應義塾大学三田研究室内 国分良成研究室(電話 03-453-4511 内線3301)です。毎週木曜日の午後に事務局を開いています。また国分は毎週火曜、水曜、金曜と大学に出講しております。

不慣れのため、はじめは不行き届きの点が多々あることと思います。今後とも御協力のほどよろしく願い致します。

末筆になりましたが、春季研究大会に関するアンケートにお答えいたしました多数の学会員の方々に厚く御礼申し上げます。(国分良成)

## <お知らせその1>

英国シェフィールド大学日本研究センター

創立25周年記念国際シンポジウム

「日本の国際化をめぐって」

(Internationalization of Japan in Comparative Perspective)

日時: 1989年9月21日(木)~23日(土)

場所: シェフィールド大学タプトン(Tapton)ホール  
詳しくは, Professor Glenn D. Hook, Director

Center for Japanese Studies  
The University of Sheffield  
Sheffield S10 2TN  
Tel: Sheffield 768555  
England, U.K. まで

## <お知らせその2>

電子メール研究交流

小生パソコン通信を最近始めました。については電子メールにより国際政治学の基礎理論とアジア・太平洋圏研究の二つの問題に関して研究交流を試み、ひいてはフォーラム開設の方向へ進みたいと考えています。会員のなかで上記の提案に関心をお持ちの方は御一報下さい。なお小生は現在NIFTY/Compu Serveと朝日パソコンネットに加入しており、まもなくPC-Vanにも入るつもりです。(青山学院大学:長井信一)

## <お詫びと訂正>

前号の編集後記で巻頭言を書き下さった先生方に謝辞を申しのべさせていただきましたが、岡倉古志郎先生のお名前が脱落しておりました。また、理事名簿の高柳先男会員のお名前が誤っておりました。お詫びして訂正させていただきます。(中嶋嶺雄)

## 《編集後記》

『日本国際政治学会ニューズ・レター: No.47』から、佐藤栄一を主任とした新しいスタッフ(志鳥学修・武蔵工大助教授、望月敏弘・東洋英和女短大講師、玉木一徳・国士館大学講師、庄司真理子・法政大学兼任講師、御子柴幸〔東洋英和女短大副手〕)が担当することになりました。本来ならば、新スタッフの編集方針を宣明すべきところですが、紙幅の都合上、ここでは、従来の編集方針を踏襲しつつ、若干の新機軸を出していきたいと思っております。その第1弾が「若手研究者の声」欄の登場であります。これから2年間、会員の皆様からの卒直など意見を反映していきたいと思っております。ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。なお、今回から新しい色にかえましたが、これは東洋英和のスクール・カラーのガーネットにできるだけ近い色を選んだものです。(佐藤 栄一)

「日本国際政治学会ニューズレターNo.47」

(1989年4月10日発行)

発行人 有賀 貞

編集人 佐藤 栄一 〒226 横浜市緑区  
三保町32 東洋英和女学院短期大学  
TEL. (045) 922-4561

印刷所 榊西村印刷